

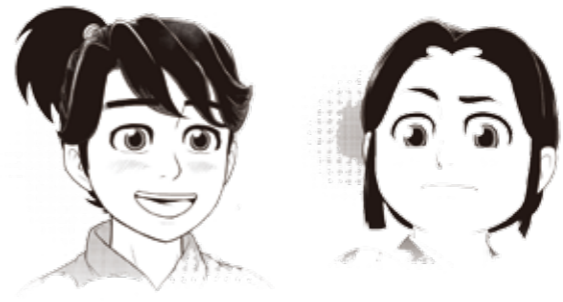


「立花宗茂と閻千代」物語

「こんな大河ドラマが見てみたい」〈第2話〉

■文：小山田桐子／挿：D&N ■イラスト：大久保ヤマト
※この物語は史実を基に、一部フィクションで作成されています。
【問】市観光課観光推進係（☎77・85063）

宗茂と閻千代、幼い日の出会い、そして二人は戦国最強の夫婦へ②



宗茂と閻千代

の快進撃を支える高橋紹運の長男として、期待とともに生まれた宗茂だが、貧弱、怠け者、鈍感と家臣たちから陰口をたたかれる始末。このままでは家を託せない、過保護な母親から引き離し、道雪のもとで厳しく鍛え上げてもらうことになったのだ。

とした美しさは隠しようもない。宗茂は彼女に少しでもいいところを見せようと、へたれながらも、必死で修行に励むようになる。しかし、閻千代はそんな宗茂を見下し、冷たい態度を取り続けるのだった。

道雪、ほんくらエピソードから宗茂のリーダーとしての資質を見抜く

おぼっちゃん育ちの宗茂、親元を離れての過酷修行！
修行先の立花城は鬼ばかり？！

9歳になった宗茂は、ある日突然、父親から、戸次道雪のもとに修行に行くよう言い渡される。毛利氏を退け、一時期九州における最大勢力となった大友氏。そ

しぶしぶ道雪のもとに向かった宗茂は、魚の食べ方から、武術まで、徹底的に叩き込まれる。毎日、へとへとになるまでしごかれ、叱られてばかりの毎日。ふてくされ、逃げ出しそうになった宗茂の足を止めたのは、道雪の娘・閻千代の存在だった。

ある日、宗茂と閻千代は家臣たちと共に町に出て、見世物の輪に加わっていた。突然、近くの男たちが口論を始め、殺傷沙汰となるが、宗茂はその場を動かさず、い。「自分が口論しているわけではないのだから、恐れることもない」と慌てる様子もなく見物が続けた。閻千代はその鈍さに呆れ、道雪に報告する。しかし、道雪はそのエピソードから、宗茂の豪胆さ、合理的に物事を判断できる頭の良さを見抜く。

※城督：城主

柳川にこの人あり

vol.80



認知症カフェ「ここばなカフェ」代表

廣松 みどりさん

蒲生・55歳

高齢者が気軽に足を運べる場所を

認知症の予防や理解のため、高齢者が気軽に集い、楽しくおしゃべりできる場所をつくらうと、看護師やケアマネジャー、栄養士など顔見知りの5人がボランティアで認知症カフェ「ここばなカフェ」を開いて2年。代表を務めているのが、看護師の廣松みどりさんです。

カフェは毎月第3木曜日の午後1時30分から約2時間、西蒲池の敬愛館で開催。毎回20人前後の高齢者や認知症の人、その家族が集まって、介護の話や専門家から聞いたり、レクレーションを楽しんだり

と、お茶やお菓子を食べながら行われています。講師との距離が近いと、参加者からも積極的な発言が出て、和気あいあいと開かれるのがこのカフェの特徴。6月21日に開かれた開設2周年記念のミニコンサートでは、ゲスト歌手と一緒に「上を向いて歩こう」や「ふるさと」の大合唱が会場に響き渡りました。

「認知症になっても、近所の人に見守られながら、住み慣れた地域で暮らすことができると、その進行を遅らせることができます」と廣松さん。カフェでは、参加者にスタッフ

が気軽に声を掛け、生活で困ったことはないか相談に乗ります。5人で始めたボランティアは、11人の仲間の輪に成長。「月1回ですが、参加者には毎回楽しみにしてもらっています。自分たちの老後のためにも、このカフェを続けていきたいですね」と廣松さんは笑いながら話してくれました。



カフェ開設2周年記念イベント

※「認知症カフェ」は市内に5か所開設されています。問い合わせは市福祉課高齢者福祉係（☎77・8516）まで。

川柳

今月の入選作品・課題
「糸」雑詠

天上の糸はつれたか雨止まぬ

吉開綾子（筑紫町）

50年に一度、という豪雨が去年と今年。雨だけではない。このところ風も暑さもまるで私たち人間を試すかのような日が続く。明らかに天地が怒っている。自然への畏れと引き換えた文明という利便。天上の糸のほつれを直すのもまた人類、という警句でもある。 流青

- 糸軋む母着古しの衣解けば 黒田和代 (吉富町)
- 亡き母と今も話せる糸電話 宮崎 武 (弥四郎町)
- 一本の糸を手繰れば夫に着く 古賀幸子 (横山町)
- 紡ぎあう見えない糸の思いやり 松藤栄子 (中島)
- 赤い糸ほどけぬようについて行く 梅崎省二 (佃町)
- 今の世は蜘蛛の糸さえずぐ切れる 大橋弘茂 (百町)
- 免許証返す糸口掴みかね 坂田信幸 (鷹ノ尾)
- 片恋は糸を結べぬ思い出よ 甲木幸栄 (蟹町)
- 縦の糸横の糸織り重ね生きる 宮川規子 (有明町)
- 人生の綻びつむぐ糸がある 古賀治美 (南浜町)
- 見えねども世に張り巡る絆糸 津留和巳 (六合)
- 遠い日の記憶の糸を手繰る日々 佐藤良子 (蒲生)
- さげもんの成長願う赤い糸 浦 哲之 (栄)
- レース糸コツコツ編みて時ゆるり 山口房子 (白鳥)
- 少しづつ結び目緩む赤い糸 古賀麗子 (吉原)
- 赤い糸今の歳では愚痴ばかり 坂井幸利 (中島)
- くみひもにいろんなれきしつむがれる 田中英視 (柳河小5年)
- 親と子とがとうめいの糸で結ばれる 原口雄斗 (柳河小6年)
- くもの糸交差しあつて雨しずく 古賀純登 (柳河小6年)

川柳を募集しています。選句者は梅崎流青さん。8月の課題は「帽子」雑詠。入選作品は9月1日号に掲載します。

●応募方法 川柳と明記し、自作、未発表の作品（※1人3句以内）に、住所、氏名、電話番号を書いて、ハガキかファクスまたは直接、柳川庁舎企画課広報係（☎77・8425、FAX 74・5520）へ、8月15日（必着）までにお送りください。

体臭の残る帽子を父から子

流青



二番山笠千代流に登場した立花宗茂。奥は閻千代姫